

図書館報

84号

平成22年3月19日発行

目次

- 002 図書館活性化プロジェクトについて
- 003 第2回北海道教育大学附属図書館懸賞論文について
 - 004 葛藤
 - 006 わくわく、ドキドキ、ほっ
 - 008 春琴抄にみる谷崎潤一郎作品中の自己憐憫
 - 010 「虫めづる姫君」との出会い 一本との出会いに運命はあるかー
 - 013 神様
- 016 図書館活性化プロジェクト報告
- 018 小著を語る
- 019 教職員著作物受贈一覧
- 020 附属図書館からのお知らせ



札幌館 図書リユースセール



釧路館 学生選書ツアー



岩見沢館 ワークショップ

北海道教育大学附属図書館「図書館活性化プロジェクト」について

附属図書館長 山本光朗

附属図書館では平成20年度より「図書館活性化プロジェクト」を実施し、今年度で2年目になります。このプロジェクトは本間謙二学長の、図書館をもっと元気にしてほしいという趣旨により、学長裁量経費を交付され実施してきたものです。附属図書館ではこれを機に、学生・院生の勉学をはじめとした諸生活面において図書館の存在価値をより一層高めるため、各構成館と共にプロジェ

クトの企画実現化に努力してきました。下に、平成20、21各年度に実施した「図書館活性化プロジェクト」の一覧を載せておりますが、このプロジェクトまだまだその緒に就いたばかりで、今後改善すべきは改善するという事は勿論、より新しい様々なプランを考え実施して行く必要があると考えております。

■ 平成20年度「図書館活性化プロジェクト」一覧

プロジェクト名	目的・内容	実施期間	備考
第1回附属図書館懸賞論文	学生自身による読書意欲・思考・表現の涵養（応募数39編）	平成20年10月～12月	附属図書館
図書館コメント大賞	学生自身による学生のための図書の推薦	平成20年11月～12月	旭川館
学生による選書ツアー	学生主体の図書選書のための書店ツアー	平成20年6月 ～ 11月	札幌館
学生・教員の創作書画の図書館閲覧室での展覧	学生・教員の書画を展示することにより図書館の閲覧環境を充実させる	平成20年5月～8月 平成20年11月～平成21年3月	札幌館

■ 平成21年度「図書館活性化プロジェクト」一覧

プロジェクト名	目的・内容	実施期間	備考
第2回附属図書館懸賞論文	学生自身による読書意欲・思考・表現の涵養（応募数37編）	平成21年11月～平成22年1月	附属図書館
図書館蔵書「若返り作戦」	新しい図書、「学生が読みたくなる図書」等の設置	平成21年11月～平成22年3月	附属図書館
学生による選書ツアー	附属図書館懸賞論文と連動した学生主体の図書選書のツアー、学生主体の図書選書のための書店ツアー	平成21年11月	釧路館 札幌館
図書リユースセール	重複図書等の、学生・教員・地域住民等への低価格販売、図書の有効利用をはかる	平成21年10月	札幌館
「しかけ絵本」展	「しかけ絵本」の資料展と作成教室の開催	平成21年12月	岩見沢館

第2回北海道教育大学附属図書館懸賞論文について

附属図書館長 山本光朗

「北海道教育大学附属図書館懸賞論文」は、本学の学生・院生に図書館の本を読んでもらいたい、本を読みオリジナルな考えをすばらしい文章にして伝えてほしい、そしてすばらしい作品は表彰し少しでも励みにしてもらえたら、といった意図で、平成20年度に創設し、今回で第2回目を実施することが出来ました。

今回の応募総数は37編で、昨年の第1回の応募総数39編に較べて殆ど差がなく、一応安定的な応募数であったと考えています。内容としては全体として、文学作品・社会問題・童話などを扱ったものが多かったように思われました。形式から見ると、「感想文」型が多く、「論文」型とみなされるものは比較的少数でありました。なお後者の中には、参考文献まで提示した「論文」形式のものもありました。

今回の応募作品を全体として見ると、大学生として何かを主張しようとする姿勢が明確に認められて大変良かったように思いました。

附属図書館ではこれらの懸賞論文を審査するため、審査委員会(委員数6名)をつくりました。各委員に応募作品をあらかじめ読んでいただき、平成22年2月に審査委員会を開き、優秀賞5点を決定しました。審査では各委員により採点が大きく分かれる場合などもありましたが、優秀賞は複数の審査委員が比較的高位の点数をつけたものでありました。また審査委員会では、「感想文」「論文」の各部門に分けるべき」等をはじめ様々な意見が出ました。今後、改善すべき点は改善し、創造的なもっと多くの作品が出てくるよう、より良いものに出来ればと考えております。

優秀賞

☆鎌倉 範人(札幌校3年)

「葛藤」

☆菊池 杏子(釧路校4年)

「虫めづる姫君」との出会いー本との出会いに運命はあるかー」

☆篠原 文(釧路校3年)

「わくわく、どきどき、ほっ」

☆長島 理沙(釧路校4年)

「春琴抄にみる谷崎潤一郎作品中の自己憐憫」

☆牧 里美(札幌校3年)

「神様」

(所属・学年は平成21年度現在)

懸賞論文募集ポスター
(H21.11.11～H22.1.8)



札幌館



釧路館 (卒業式にて表彰)



葛藤

鎌倉 範人

動物行動学と聞いて、それが何かすぐにピンとくる人は多くないかもしれない。しかし語感から考えて、もしかしたらこんな学問かな、と推測できる人は多いだろう。恐らくその推測は当たっている。私はある授業のレポートのために読んだ『わたしの先生』という著書の中で、この学問領域を知った。その中で、動物行動学は軽くしか触れられていなかったが、その内容と動物行動学の名称から、おおよそどんな学問かは予想がついた。しかし、今回『〈動物行動学入門〉ソロモンの指環』を読み、ある一点だけ大きく読みが外れていたことがあった。それは、動物たちが思っていた以上に神秘的であるということである。以下には『〈動物行動学入門〉ソロモンの指環』のほんの一部を紹介する。

ある宝石魚類の魚がローレンツの研究室に飼われていた。この魚の育児は、見ていてもはるかに感動的で、『〈動物行動学入門〉ソロモンの指環』によると、

巣の中に卵あるいはまだごく小さい子魚がはいっている間、彼らは巣に誠実に「奉仕」する。トゲウオがやるように、水をあおってたえず新鮮な水を巣に送りこむ。一定の時間ごとに、夫婦は軍隊のような正確さで交替する。やがて子魚たちが泳げるようになると、親は注意深く彼らを引き連れて泳ぎ、子魚の群れはいとも従順に親のあとからついてゆく。すべて一度みたら忘れられぬ、絵のような光景である。

さらに

子魚たちは生後数週に達するまで、毎晩日暮れどきになると、幼い時代をすごした巣穴へ連れもどされる。母親は巣の上にごんばっていて、きちんとしぐさのきまった動きをして子魚たちをひきよせる。(中略) そのひまに父親は、水槽じゅうをせわしく泳ぎまわり、おくれた子はいないかとさがす。もしいたら、もう呼びよせるようなまだるっこいとはせず、さっさとそいつを口の中へ吸いこんで、巣まで運び、巣穴の中へ吐きだしてやる。

と記されている。これは実に人間らしく見える行動ではないだろうか。公園で遊びまわっている子どもの集団にある一人の親が「帰るぞ」と声をかけると、親の声を聞いた我が子は自ら親の元へやってくるだろう。しかし、まだ遊び足りないとか、単に周りの声に集中しておらず、声をかけられても親の元へやっこない場合も恐らくあるわけで、そういう時には腕を引っ張って強制的に連れて帰ることになる。やり方は違えど、宝石魚はこれと似たような行動をしているのである。

しかし、ここまでは単に、宝石魚は遺伝子にインプットされた通りに動いているに過ぎないだろう。つまり、新しい事態に何も対応できないと考えられるかもしれない。ところが、この宝石魚の話にはまだ続きがある。私が真に興味深く感じ、感動したのはその部分である。以下は午後遅くに研究室に入ったローレンツが、子魚を寝かしつけている途中の宝石魚に餌のミミズを与えた時の話で、父親が仕事(迷子探し)をお留守にして、ミミズにかみついた後のことである。

ところがそのとき、一匹の迷い子が水槽の中をひとりぼっちで泳いでいるのが目にとまったのである。電気でもかけられたように彼はとびあがって、すぐその子に追いつき、もうミミズでいっぱいになっている口の中へさらに子魚を吸いこんだ。さておもしろいことになったものだ! 魚はまるでちがう二つのものを口の中に入れていた。一つは胃袋へ、もう一つは巣穴へ運ぶべきものなのだ。どうなるだろう? (中略)

ところが現実には起こったのは、はるかにすばらしいことであった! 魚は口をほおぼらせ、硬直したようにじっとしていた。かむこともせず……。私は魚が思案するのを見た! 考えてもみたまえ。魚が真に心の葛藤におちいるとは。そして、まるで人間と同じように、あらゆる道を断たれ、立ちすくんだまま、進むことも退くこともできないことになりうるとはなんとおどろくべきことではないだろうか。

これはフィクションではない。ローレンツや彼の弟子が見たノンフィクションドラマなのである。もしこの事態の解決策が遺伝子にインプットされているのであれば、この魚は一時停止するまでもなく、すぐに何らかのアクションを起こすであろう。しかしそうではなかった。どうすべきか、確かにこの魚は葛藤していたのである。子魚を口に放り込んで巣穴へ運ぶことも、食事をとることも本能であろう。つまり本能と本能がぶつかり合っただけの葛藤なのである。

あなたは、魚が葛藤を起こすなんて、知っていたのだろうか。少なくとも私は考えたことすらなかった。なにしろ、魚である。犬や猫が葛藤を起こすというのならなんとなくわかる。しかし、魚である。食事時に魚を食べたことがあるだろう。そこで私は彼らの脳を見たことがない。恐らく脳みそ自体はあるのだろうけど、小さすぎるせいか、見たことがない。だからこそ、彼らが思考するなんて考えたことがなかったのである。ただ遺伝子にインプットされたプログラムのままに生きていたかと思っていたのだが、これは今考えれば非常に恥ずかしいことである。

さて、さっきの宝石魚はいったいあの後どうしたのだろうか。結局飲み込んでしまったのであろうか。

何秒もの間、宝石魚の父親は壁につきあたったようにつつ立っていた。だが彼の中でどんなことがおこっているか、ありありとみえるようであった。ついに彼は、この心の葛藤を彼なりの方法で解決した。それはまったく尊敬の念を禁じえないものであった。彼は口の中のものをぜんぶ吐きだした。

なんと彼は口の中のものを全て吐きだしたのである。そして水底に沈んだミミズを食べたあと、子魚を口に放り込んで巣穴に送り届けたのである。もしかするとあなたは、なんだそんなことかと思われているかもしれない。しかし何度も繰り返すように、このノンフィクションドラマの主人公は魚なのであり、解決したのも魚本人なのである。さらに、子魚ごと飲み込むことや、ミミズを口に含んだまま巣穴に向かうということをせずに、その場で吐きだして解決するという、実に頭のいい行動をとったのである。この部分を読んだのは登校途中のバスの中だったのだが、私はあたかもその現場を実際見たかのように、心の中で賞賛の声を上げ、気づくと表情がほころんでしまっていた。

だからもしかしたら周りから変な目で見られていたかもしれない。しかしそんなことは関係ない。なにしろ、思わずほころんでしまうほどの感動はとて久しぶりに味わったのである。変に思っても、見て見ぬふりをしていただきたい。

動物行動学とはその名の通り、動物の行動を研究する学問である。しかし、これが何の役に立つのかと考えてしまうのは必然的なことかもしれない。私は、研究とは研究者の知的好奇心を満たすために行われるべきだと考えている。今回、『〈動物行動学入門〉 ソロモンの指環』を読んでますます、その考え方に確信を持った。なぜなら、この著書の文章からは著者であるローレンツの動物への愛が、ひしひしと感じられたからである。彼は、何かの役に立とうなんて思って、動物たちの行動を研究しているというわけではなさそうだった。ただ動物の魅力に強く引き付けられているからこそ、研究を行っているのである。ところが、それらの研究によって動物の生態がわかり、いくつかの利益を世の中にもたらしたことは事実である。そうでなければ彼がノーベル賞を受賞することなど考えられないのだから。

私は動物を愛してやまないローレンツの『〈動物行動学入門〉 ソロモンの指環』に出会ったことを、非常に光栄に思っている。この著書は私を私の知らない世界へ招待してくれたのである。もし、高校時代以前にこの著書に出会っていたのなら、私は先ほどの宝石魚のように葛藤していたかもしれない。教育学の道に進みたいが、動物行動学の道にも進みたい。宝石魚は実に感心する解決策を実行していたが、私の場合は、一度岐路に立たされてしまったら、どちらの道も上手に進めないような気がしてならない。仮に一方の道に足を踏み入れたとしても、もう一方の道を諦めきれずに、悶々と学生生活を過ごしていたかもしれない。そう考えると、この時期に『〈動物行動学入門〉 ソロモンの指環』に出会った運命に感謝すべきなのかもしれない。

『〈動物行動学入門〉 ソロモンの指環』

コンラート・ローレンツ著、日高敏隆訳、早川書房、1987

(かまくらのりと・札幌校3年)



わくわく、どきどき、ほっ

篠原 文

三つ子の魂百までとはよく言ったもので、小さなときから絵本が好きだった私は、今でも絵本や児童書、児童文学が好きだ。とくに「わくわく、どきどき、ほっ」がある物語が大好きだ。本を読みながら、何が起こるんだろうと「わくわく」し、どうなるんだろうと「どきどき」し、最後にはああよかったと「ほっ」とするのだ。人によってはマンガにだって、テレビにだって、ゲームにだってそれはあるだろうと言われそうだが、マンガもテレビもゲームも好きな私は、別にそういったメディアを否定しようという気はさらさらしない。それはそれで大好きだ。そうはいてもやはり、本には本のよさがあると思うのだ。だからこそ、まだ本の世界で「わくわく、どきどき、ほっ」を感じていない人には、ぜひ「わくわく、どきどき、ほっ」を感じてもらいたいのだ。

そこで、私の好きな本を紹介したい。たとえば、『ダンプえんちょうやっつけた』（作：ふるたたるひ 絵：たばたせいいち）はどうだろう。広い遊び場も運動場もない「わらしこほいくえん」の子どもたちが、ダンプえんちょうとの遊びの中で成長していく物語だ。運動場が無くとも、子どもたちには神社の石段の滑り台や、木から下がったつるのブランコがある。町全部が「わらしこほいくえん」の子ども遊び場だと豪語する園長とともに、子どもたちはリヤカーに乗って小高い丘へ遊びに出かける。子どもたちが遊ぶ中で、正義の味方ダンプえんちょうとわらしこかいぞくの戦いが始まり、正義の味方は大人気なく子どもをたおしてしまうが、「だって怖いんだもん。怖いことはしないんだもん」が口ぐせだった一人の女の子の活躍から大逆転が起こるのだ。

握ったおにぎりをポリ袋に包んで、一升瓶を水筒にしてリヤカーで行くというワイルドな遠足を、はたして今まさにその年ごろを生活している子どもたちは、経験するのだろうかと考えると、非常に難しい気もするが、「横断歩道の白いところ

しか渡れないこと」「歩道のブロックは色の濃いところだけ渡れること」といったルール遊びはきっとしているのではないだろうか、そして今はしなくなってしまったオトナも経験はあるのではないだろうか。「原っぱは全部海で、この丘のところは島ね」そんな友達の（もしくはあなた自身の）言葉で、緑の原っぱはどこまでも広がる青い海になり、丘はそこにぽっかり浮かぶ島のようにになってしまう。そんな子どものころにどこかで感じたような感覚が、『ダンプえんちょうやっつけた』には沢山盛り込まれており、ものがたりの中の子もたちが感じる「わくわく」や「どきどき」が子どもたちからあふれ出して、私の目の前にその光景をありありと描かせるすてきな物語だ。

もうひとつ同じ作者のものがたりを紹介したい。それは『おいしいのぼうけん』（作：ふるたたるひ たばたせいいち）だ。こちらも舞台は保育園だが、土と草とお日さまの匂いがするのが「わらしこほいくえん」の物語なら、こちらの「さくらほいくえん」の物語は、ちょっと湿った綿と木の匂いだろう。ミニカーの取り合いで先生に怒られ、押入れの上と下に閉じ込められてしまった二人の男の子が、怖い怖い押入れの奥の、これまた怖くて不思議な世界を冒険する物語だ。

『ダンプえんちょうやっつけた』には、目や耳や肌を感じる「わくわく」「どきどき」があったが、『おいしいのぼうけん』の「わくわく」「どきどき」は、「天井の染みがおばけの顔だったらどうしよう」とか、「真っ暗な部屋で窓を見たら自分の後ろにおばけが映っていたらどうしよう」といった、オトナになった今でもふと浮かんだりする、考えたくないのに思い浮かんでしまう怖い想像や、友達と協力して困難を乗り越える嬉しさや達成感の「わくわく」「どきどき」だ。

この二つの物語には、目や耳、肌などの五感で感じた情景、空想や想像、人とのかかわりなどの心で感じた気持ちがある。そして、二つの物語の

「わくわく、どきどき、ほっ」にかかせないのが、冒険と成長の要素だ。「わらしこほいくえん」の女の子の「だって怖いんだもん。怖いことはしないんだもん」という口ぐせは、物語の最後には「だって怖いんだもん。怖いことは面白いってわかったんだもん」に変わってしまう。「さくらほいくえん」の怖いものだった押入れは、「さくらほいくえん」の面白いものになってしまう。すると私は、よかったよかったと「ほっ」とし、子どもたちの成長とその先にきっとあるだろうさらなる冒険の毎日を想像して、また「わくわく」するのだ。

本には文字しかなく、絵本だってそれに挿絵がついたくらいで、多種多様な情報があふれる現代において、本の持つ情報の形は非常に少ない。本にはテレビやゲームが見せてくれるような動きや音はないが、だからこそ味わえる「わくわく、どきどき、ほっ」がある。本は、目に映るものの動き、聞こえてくる音、鼻で感じる香り、肌に触れる感触など、様々な感覚を言葉で表す。言葉は集まって文章になり物語になり世界を描く、そして、その世界を感じるのは私なのだ。画面のあちら側の登場人物を眺めるのではなく、ページの向こう側の登場人物の目を借り、耳を借り、私が感じる世界を思い描くのだ。すると物語の世界は、誰か

が決めた色ではなく、私の知る空の青や木々の緑、私の感じる喜びの黄色や優しさの桃色で描かれだし、私の心はあっという間に物語の中へ飛び込んでしまう。

本の物語を感じるのは読者の心だ。100人の読者がいれば、100通りの感じ方がある。だからこそ、私が紹介したのは、私が感じた「わくわく、どきどき、ほっ」の一例でしかない。100人の読者がいれば、100通りの「わくわく、どきどき、ほっ」がある。まずは、自分の心が世界を描き出すような物語にぜひ出会ってもらいたい。そうしたら今度は、感じたものをほかの人と語り合ってもらいたい。他の心に触れると、きっと、あなたの感じる物語の世界はどんどん深く鮮やかになる。長い物語に抵抗があれば、それこそ絵本がいい。絵として描かれた登場人物や景色が、物語の世界への扉をあなたのために開いて待っていてくれるのだから。

『ダンプえんちょうやっつけた』

作：ふるた たるひ、絵：たばた せいいち、童心社、1978

(しのはらあや・釧路校3年)





優秀作品

春琴抄にみる谷崎潤一郎作品中の自己憐憫

長島 理沙

マゾヒスト文学、悪魔文学、谷崎の作品はその特有の視点・描写からよくそう評される。先行研究では作品主人公と谷崎自身を結びつけて、谷崎の生活が描かれているというものまである。作者と物語はその世界が全く違うものであり、同一視されてはならないにも関わらずである。

今回小論文に取り上げる『春琴抄』では谷崎自身でない男性主人公の自己憐憫というフィルターの中にある女性の哀しみについて考えていきたい。

春琴抄には我が儘で気難しい琴の名手、春琴とその奉公人佐助が登場してくる。「されば両親も琴女を視ること掌中の珠の如く、五人の兄妹達に超えて唯りこの子を寵愛するに、琴女九歳の時不幸にして眼疾を得、幾つもなくして遂に全く両目の明を失ひければ、父母の悲嘆大方ならず、母は我が子の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂わせるが如くなりき。春琴これより舞妓を断念して専ら琴三味絃の稽古を励み、糸竹の道を志すに至りぬ」はじめ春琴は美しく描かれる。盲目であるからこそ自身の美貌に絶対的な自信を持ち、周りにも自分中心に接していく。特に奉公人の佐助に対しては他人以上に傲慢に振る舞い、佐助においても春琴の傲慢がより一層深められるよう奉公する。

ここに谷崎作品がマゾヒスト文学と言われる要因がある。佐助はあたかも自分がより可哀想な報われない状況に陥るよう、春琴の傲慢に従っていく。春琴に与えられる苦痛を窓口として自分の自己憐憫世界に浸るようすはマゾヒストというよりむしろ、ナルシストである。周囲に憐憫の眼差しで見られることはもちろん、それよりも佐助は自

分が可哀想と思うことが重要なのである。偶然にも佐助がその願望を最大限に最高の状況で実行できる機会が与えられる。

「賊は予め、台所に忍び込んで火を起し湯を沸かした後、その鉄瓶を掲げて伏戸に侵入し鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾け、真正面に熱湯を注ぎかけたのであると云う。最初からそれが目的だった。(中略)その夜春琴は全く気を失い、翌朝に至って正気付いたが焼け爛れた皮膚が乾き切るまでに2箇月以上を要した中々の重傷だったのである。」春琴は彼女の存在の中心意義であった美貌をこの事件でなくしてしまう。

作中においても一応の犯人探しはするが、結局あやふやなままで分からず終いとなる。ここでは犯人や犯人の動機は重要ではない。醜くなった春琴の事件を受けて、佐助がどのように行動するかが重要なのである。

「或る朝早く佐助は女中部屋から下女の使う鏡台と縫針戸を密かに持ってきて寝室の上に端座し鏡を見ながら我が眼の中へ針を突き刺した。針を刺したら眼が見えぬようになると云う智識があった訳ではない。成るべく苦痛の少ない手軽な方法で盲目になろうと思い試みに針を以て左の黒眼を突いてみた。黒眼を狙って突き入れるのは難しいようだけれども、白眼の所は堅くて針が入らないが、黒眼は柔らかい。二三次突くと巧工合にづぶと二分入ったと思ったら、忽ち眼球が白濁し、視力が失せていくのが分かった。出血も発熱もなかった。痛みも殆ど感じなかった。此れ水晶体の組織を破ったので、外傷性の白内障を起こしたものと察せられる。佐助は次に同じ方法を右の眼に施し、瞬時にして両眼を潰した。尤も直後はまだ

ほんやりと物の形なども見えていたのが十日程の間に完全に見えなくなったと云う。」佐助は醜い春琴を見ないように、彼女の意向に十分以上に沿って自らの眼を潰した。春琴を思っただけで行動する佐助は胸が熱くなるほど従順な奉公人である。しかし、彼が自ら眼を潰す際の描写はどこか嬉々としている様子が伺える。少し考えてみると佐助は自ら盲目になる必要は全くない。それどころか盲目で顔と心に怪我を負った主人を助けるためにはむしろ盲目であってはならない。

佐助の自虐行為は自分の記憶の中の春琴を美しく留めておくための手段にほかならない。さらに自虐行為によって可哀想な自分を最高の機会に演出し、自己憐憫にどっぷりと浸ることができる。

しかし最高以上はない。佐助は思う存分最高の機会を利用し尽くしてしまった。佐助の中の春琴はいつまでも美しく傲慢なままである。現実での春琴は美しさを失い、自信も失ってしまう。

「春琴の方は大分気が折れて来たのであったが、佐助はそう云う春琴を見るのが悲しかった、哀れな女気の毒な女としての春琴を考えることができなかつたと云う。(中略) 佐助は現実に眼を閉じ永却不変の観念境へ飛躍したのである。彼の視野

には過去の記憶だけがある。もし春琴が災禍のため性格を変えてしまったとしたら、そう云う人間はもう春琴ではない。彼はどこまでも過去の驕慢な春琴を考える(中略) 佐助は現実の春琴を以て観念の春琴を呼び起こす媒介としたのであるから対等な関係になることを避けて主従の関係の礼儀を守ったのみならず、前よりも一層己を卑下し、奉公の誠を蓋して少しでも早く春琴が不幸を忘れ去り、昔の自信を取り戻すように努め(後略)」佐助のマゾヒスト・ナルシストによる願望を満足させる媒介としてだけの春琴。美しさだけではなく、自信を失った哀しみさえも口にだすことはできず、佐助の中の春琴を演じなければならない。

記憶に春琴を留めた佐助にはもはや春琴は必要ではなく、本当に佐助を必要し、求め続けているのは春琴である。『春琴抄』を読んで男性に従わざるを得ない女人の孤独な哀しみを知った。

『豪華版日本現代文学全集18谷崎潤一郎(一)』
谷崎潤一郎著、講談社、1981

(ながしまりさ・釧路校4年)





「虫めづる姫君」との出会い

— 本との出会いに運命はあるか —

菊池 杏子

「人と人との出会いに運命的なものがあるように、私は人と本の間にも運命みたいなものが存在すると思うの。その人とその本が会おうべき最良の 때가きつとある。だから、誰かにとっての運命の出会いを見逃さないように手助けできたらと思うし、その場所やきっかけを与える場所として、図書館があったらいいなと思うの。」

これは、私が高校生の際に図書館の司書さんからかけてもらった沢山の言葉の中で、最も印象に残っている言葉である。人にとっての図書館という場所が、どんな存在であるのかを私は知らない。しかし、たしかにあの図書館は、私にとって沢山の素敵な出会いを運んでくれた場所だったように思う。本との出会いはもちろんのこと、様々な人との出会い、あの時には想像もできなかった古典文学に心惹かれる「いまの自分」があること、きつといま私の周りにある全ての物事のはじまりはあの空間にあったと言っても過言ではないように思う。そう思えるほどに、あの時の私にとってのあの場所は他のものには代え難い大切な場所だった。勉強に追われ、なんだか周りに流されて、必死に過ごしていた毎日の中で、あそこで過ごす時間があの時の私にとって一番の安らぎだったことは、いまでも疑う余地のないことなのだから。そしてきつと、目まぐるしい毎日を送っていたあの頃に図書館を大事な場所だと思っていたのは、私だけではなかったと思う。

「本との運命の出会い」これを信じてみたい、ただそれだけの理由から、大学では日本文学に真剣に向き合い、必死に取り組んでみようと思った。四年間をかけて、一冊も運命の本に出会えないのならば、それはそれで私と文学作品の間に運命的なものもともとない、文学を学ぶのは向いていなかったのだということを感じ、私自身がこれまで国語を学んできた中で感じた様々な葛藤についても納得できる気がしたのである。

教育大学に進学して何かを専門的に学ぶのなら、将来のために自分の抱える苦手意識を払拭し

ておきたかったし、自分の尊敬する人たちが好きだと思えるものを絶対に好きになりたかった。でも、日本文学を学びたい動機がそれだとは、どこか学ばず者としては不純な気がしてしまい、どうしても言えなかった。そのため、志望動機を書く紙には、本音をひた隠しにし、適当でいかにもそれらしい理由を作り上げて書いたことをいまでもよく覚えている。いま思いかえしてみれば、あの紙には特別な意味が込められていたわけではなかったよだから、そこまで警戒する必要もなかったのだと思えるのだが、あの時はそういったことまで細かく気にするほど、とにかくいろんなことを自分なりに何とかしてみたくて必死だったのだと思う。

しかし、そんな必死な思いで手に入れた学ぶ場所にあっても、もともとこの苦手意識を払拭していくことはそう簡単なことではなかった。その当時に私が文学作品に対して抱いていた印象といえば、古典文学に関しては絶対に読み違いをできないという妙な圧迫感であり、逐語訳の楽しさは見出せない、楽しみ読みはそれなりに好きで貪欲に取り組めても、調べ読みで本を読み進めることは、かなりの苦痛であり、困難なことだった。

「本との運命の出会い」を信じたい、そんな私の望みを打ち砕くかのように、とても運命とは思えないような本との出会いが続き、読む楽しみよりも読む苦しみが増していくばかりで、正直言って学ぶ楽しさを見出せない時期は長かった。

どうしてここに来たかったのか、何故自分は頑張りきれないのか、もともと私には無理だったのだろうか、そういった答えのない自問自答を繰り返すばかりで、人よりも多くの時間をかけて努力をすることでしか人並みなことができない自分が本当に悔しく、情けなかった。自分で選んだ場所のはずなのに、逃げたいと思うことの方が多かったかもしれない。

さまざまなことを後悔し、前向きになれなかった中で、私は一つの物語と出会った。それが、『堤中納言物語』の中の一編である「虫めづる姫君」

である。

「虫めづる姫君」とは、あらすじを以下に示すと、

蝶の好きな姫君の隣の邸に安察大納言の邸があり、この邸の姫君は、物の本体こそ心ばえがあるものと思ひ、蝶の本体である珍しいさまざまな毛虫ばかりを集め、年ごろになっても化粧さえせずにいた。両親も侍女たちも困惑するのだが、陰口も何のその、姫君は男童を使って虫を採集するのであった。とうとう世間の評判になって、右馬佐という上達部の息子は帯の端を蛇の形に似せて動くような仕掛けをして、鱗模様の懸袋に入れて文を送るといういたずらを試みる。姫君は恐ろしいのをこらえながら、贈り物についていた歌を詠み、無風流な厚紙に片仮名で返歌をする。物好きな右馬佐は風変わりな、この様子に面白いと思ひ、友人の中将とともに卑しい女の姿に変装して立部の陰から垣間見をする。姫君は評判通りで、あきれはてて、姫君の姿を見たという歌を贈って、笑いながら二人は帰った。

(『鑑賞 日本古典文学 第十二卷 堤中納言物語とりかへばや物語』より)

という物語である。あらすじだけでは、面白さを伝えることが難しいのだけれども、古典文学の中で、一瞬にして私の心を奪っていった物語は大学で日本文学について四年間学んだいまとっても、これ以外には思い当たらない。それまでの私にとっては、古典文学との間には、「正確な逐語訳をすること」というとてつもなく大きな壁があり、ある程度読めないと面白さも何も感じられないものでしかなかった。そのため、いつも取り組むことに抵抗感があり、上手く読み解けない自分に悔しさを感じながら、その難解さに苦しみつつ努力を重ねてもどうしようもなく、読み解きは苦しみだと感じていたというのが本音である。

ところが、それまでに講義で扱った物語などと違い、『堤中納言物語』は「短編集」であるということ以外は全く知らないものだったためか、「虫めづる姫君」との出会いは「なんだか奇怪で面白そうだな」と思えた。知りたい、読みたい、もっとももっとわかりたい、わかるようになりたいと思ったのは、本当に久しぶりのことでそれがとても嬉しかった。まだ自分が幼い頃に、とにかく読みたくて本を読んでいた頃感じていた、「読む

ことの楽しさ」をこの物語が私に思い起こさせてくれたのである。

この物語との出会いが遅かったために、この運命の出会いを学士論文などの自己の勉強へとつなげられなかったことは、それまでの自分自身の努力の不足によるものだと感じている。しかし、個人的な楽しみとして心から楽しんで読むことができたからこそ、私の考えを百八十度変えてくれた物語となり、この出会いを運命的なものとして感じているのだと思う。きっと、この物語に出会えたタイミングは私にとって最良な時だったのだろう。

「虫めづる姫君」の姫君は、良く言えばとても個性的で、悪く言えば変な人である。蝶ではなく毛虫を好み、眉のお手入れもしなければ、お歯黒もしない。当時の常識から考えると、彼女の存在はどこまでも非常識であり、周囲からすると受け入れがたい存在であろう。でも、ただの変人なのかというと、決してそうではないところに、彼女の魅力がある。

私はきっと、彼女の魅力に魅せられてしまったのだと思う。「恋は盲目」とはよく聞く言葉で、別にこれは恋ではないが、とある人の中に自分にとってとても好ましい部分を見つけてしまったとき、その人の欠点というものは誰しも見失うものではないだろうか。私は、彼女の言葉に好ましさを感じ、人としての魅力を感じた。毛虫を好むことにも、化粧を嫌うことにも、彼女らしいもったもな理由があり、彼女はそれを譲りたくないだけなのだを知ったとき、何だかとても愛しく感じてしまったのである。たしかに、毛虫を好むことや化粧をしないことは、彼女の女性としての魅力を損なうことかもしれない。しかし、それが彼女のひととしての魅力を損ねているとは私には思えなかったのである。

姫君の言葉の中でも、特に好ましく感じたのは、

「人々の、花、蝶やと愛づるこそ、はかなくあやしけれ。人は、まことあり、本地尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ」

「ひとはすべて、つくろふ所あるはわろし」

(『鑑賞 日本古典文学 第十二卷 堤中納言物語とりかへばや物語』より)

という部分である。

第2回北海道教育大学附属図書館懸賞論文

はじめてこの物語を読んだとき、「表面的なものを好み、その物事の本質を知ろうとしないなら、それを好きだとは言わない」「なぜ(化粧などして、わざわざ)装わなければならないのか」と、なんとなく空気を読んで周囲との歩調を合わせようとしている私自身に言われた気がしたのである。そこはあくまでも私の個人的で勝手な楽しみ読みにすぎなかったのだが、これをきっかけとして、どうしようもなく彼女に心惹かれてしまった。

この物語における彼女の行動や描かれ方は、当時の人々にとってはへりくつで滑稽なものであったかもしれない。だが、小さなことで思い悩み、立ち止まっては戸惑っている私にとっては、彼女の生き方はどこまでも清々しく真っ直ぐに感じられた。

例え、自分の考えに賛同するものが一人もいなくとも、その道を突き進んでいる彼女を羨ましく感じるとともに、私も感情の赴くまま、真っ直ぐに生きたいと思った。現代において自分の望むままに生きることよりも、平安時代に彼女のような生き方をすることの方がきっと難しかったはずである。だからこそ「ありえない話」として当時の人々に愛された物語となったのだと思うが、現代に生きる私には当時とは違う読みがあってしかるべきではないだろうか。

物語を読むこと、そこで楽しむことは、なにも正しい逐語訳を追い求めることではない。逐語訳を進めて物語を読み解く中で、いかにそこで駆使されている文章表現を訳として反映できるか、そこが現代語訳の楽しさというものなのではないだろうか。この物語と姫君は私にそれを気づかせてくれた。古典文学の読み方を教えてくれた。もっともっと楽しい読みがあることを示してくれたのである。だから、私はこの物語との運命の出会いを信じたい。この大学で過ごした四年間の中で、この物語と出会うことができ本当によかった。

私がこの物語と出会ったのは、ただの偶然だったのかもしれない。私にとっては困難な調べ読みを進めている中で、何となく手に取った一冊の中に『堤中納言物語』のあらすじが載っていて、そこから面白半分です手に取ってみる気になったのだ

から。この物語との出会いを運命だと信じたい今、私が思うことは、本との出会いを運命にできるかどうかは、私の心次第だということである。

本との出会いを運命に、自分にとってよいものができるかどうかはその人の心次第であるならば、図書館という場所は以前に司書さんが言っていたように、誰かにとっての運命の出会いをサポートする存在となるのではないだろうか。私は、きっと人よりもほんの少しだけ早い段階で図書館や本の魅力に魅せられた経験があったというだけなのだろう。

これから、一人の大人として社会に出る中で、受けとる側ではなく誰かに授ける側に立つ存在として、多くの人たちにとっての運命の出会いを手助けできる一人になりたいと思う。そう思うきっかけとなった図書館と、「虫めづる姫君」との出会いに感謝している。これを運命とできるかどうかは、きっとこれからの自分の取り組みと頑張り次第なのであろう。しかし、それができない気はしない。今の自分にとって最も必要なことは、姫君の生き方を適度に見習って、自分の信じた道を切り開いていくことなのではないかと思えるから。

図書館という場所が、私と「虫めづる姫君」との出会いを与えてくれたように、まだ運命の出会いをしていない多くの人たちにとっても、素敵な出会いを与えてくれる場所となることを願いたい。

- ・『堤中納言物語 とりかへばや物語 新日本古典文学大系26』、今井源衛 他 校注、岩波書店、1992
- ・『鑑賞 日本古典文学 第十二巻 堤中納言物語 とりかへばや物語』、今井源衛 他 編、角川書店、1976
- ・『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 とりかへばや物語』鈴木裕子編、角川書店、2009
- ・『落窪物語 堤中納言物語 新編日本古典文学全集』校注・訳 三谷栄一 他、小学館、2000

(きくちきょうこ・釧路校4年)



神 様

牧 里美

神様のいる場所はきっとたくさんある。私を救ってくれるものもちゃんとそこにある。しばらく海は見られないけど、違ったものが私を待っている。

「さあ、行こう」
私は荷台から飛び降りた。

この本は、こう締めくくられている。読み終わって、私は、なんて心が温まる本なのだと感じた。それは、日常的なやりとりが描かれているこの作品のタイトルの、図書館の「神様」という少し日常から離れた表現が、おもしろいけれど、妙に納得して、すごく心地の良いものだったからだと思う。

主人公は、高校国語講師の清。彼女は、いつも正しくあることに重きをおいて人生を生きてきた。何事もまじめにまっすぐやればいい。そのルールに従うだけだから、人生は簡単だと思っていた。ある出来事が起こった時、清の、その清く正しいと思い込んでいた人生がひっくりがえってしまう。清は、小学校からずっとバレーボールに力を注いでいた。常に向上を目指した清は、強いプレイヤーになり、高校の時にキャプテンとなった。そして、ある練習試合で、補欠の山本さんを投入したことが原因で、なんでもない試合に負けてしまった。バレーに関して厳しい清は、反省会で山本さんを泣かせてしまった。清は、間違っただけをしたわけではないと思い、あまり気にかけてはいなかったのだろう。しかし、次の日、山本さんが自殺したという悲報が飛び込む。清は、反省会のことが脳裏によぎりながらも、そんなことで死ぬ人間がいるわけがないと思っていた。しかし、周りにはみんな、清を責め、真実がどうあれ、清は罪悪感や非難の目に耐えられず、バレーボールから離れていった。バレーボールがすべてだった清にとって、これは、人生の転機となる。その後、清は、次第に清さや正しさが薄れ、投げやりになっていった。

清は、地元から逃げるように、田舎の大学に進学した。清さを失ったことと人の愛に飢えていた

ことが理由なのか、妻子ある男性との関係も断ち切れずにいた。こんな境遇にある清が、文学部ただだけの理由で、高校の国語講師になり、海の側にある高校で、部員がたった一人の文芸部の顧問として過ごす日常生活を描いた作品である。

バレー部の顧問になりたかった清にとって、図書室で静かに活動する文芸部はつまらないものでしかなかった。部員は、3年生の垣内君である。垣内君は、中学時代にサッカー部キャプテンの経験があり、清は、なぜ彼が文芸部にいるかが謎だった。バレー部などのスポーツと違って目指すものもなく、メリハリがない。こんな清の言葉に対する垣内君の答えはこうだ。

「毎日筋トレして、走りこんで、パスして、後は、レシーブ練習サーブ練習などなど。バレー部の方が毎日同じことの繰り返しじゃないですか。文芸部は、何一つ同じことをしていない。僕は毎日違う言葉をはぐくんでいる。」

私は、これを聞いて、清と同じく、どきっとした。そして、すごく嬉しくなった。こんなことをさりとて言う高校生は日本にいるのだろうか。私も、本は大好きで、昔からとにかく読み漁っていた。しかし、年齢が上がると、だんだん遠ざかってしまっていたが、改めて、文学の素晴らしさを垣内君に教えてもらった。一つ垣内君に反論するならば、スポーツも毎日同じことの繰り返しの中に、少しずつ、前とは違う部分を見つけることができ、それが強さにつながっていくのだ、と伝えたい。

垣内君は、清の性格のちょっとした特徴や欠点を見つけ、素直に伝えるシーンがいくつかある。でも、生意気なわけではなく、清が自分で気づいていなかったことを、教えてくれるといった感じだ。

「先生はそういう行き当たりばったりな性分じゃない気がするんですが。」

「何か間違っただけを言ってる？って、そんな堅苦しいことを言ってるから頭痛になるのですよ。そうやって、正しさをアピールすると、体力を消耗しますよ。」

第2回北海道教育大学附属図書館懸賞論文

この、垣内君は、あまり感情的にならず物事を冷静に見るクールな少年だが、それなりに悩みもあった。垣内君は、キャプテンだったサッカー部で、ある部員が練習中に倒れて入院したことがあった。そのことは、垣内君のせいではないのに、垣内君は責任を感じ、それ以来、誰かの怪我や病気に敏感になった。垣内君は、こんな風に言う。

「見た目に健康状態が分かりやすい人はいいかも。僕は相手の内面を読み取る能力が低いので、そうやってアピールしてもらえると助かります。」

本人の中では、ちょっとした悩みでもあり、ネガティブな考え。だけど、相手に目を向けようとしている垣内君の優しさがすごく心地よい。そんなちょっと照れくさいと感じるようなセリフを清に整然と話す姿が、すごくかっこいいと思う。

垣内君の詩にもそんな優しさがにじみ出ている。

雑草は、強いと言いますが、どうしてでしょう。
彼らだって弱い部分があるはずです。

「踏んでもすぐに立ち直る」

「愛情をかけなくても強く生き抜く」

かわいそうです。

見てられません。

聞いてられません。

僕は彼らの弱い心を見つけられるそんな大人になりたいです。

これは、清にとって、すごく嬉しい詩だったのではないかと思う。強く、正しく生きることから逃げた自分。でも、そんな弱さを許してくれるかのように、垣内君の詩は優しいものだっただろう。また、清に対する態度や言葉の節々に、優しさがある。垣内君に会ってみたいと思うほどだ。

清のちょっとふざけた言葉や疑問にもきちんと答える、垣内君の真面目さと優しさが入り混じった言葉が、とても多い。川端康成の小説では、少し意外な場面で主人公が鼻血を出すシーンがある。面白さを感じ、流行っていたのかなあ、という清の少しおどけた言葉に垣内君はこう答える。

「さあ。神妙な気持ちの時は鼻血が出るものじゃないですか。」

そして、ピーナッツを食べている時も鼻血が出るが、あれも神妙な気持ちなのか、などと、互い

の考えることを冗談も交えながら話し合い、部活動をしていく。垣内君の、文学好きについていけなさを感じていた清も、だんだんと文学のおもしろさにはまっていく。二人のやりとりは、なぜか、見ていて楽しい。清の少し気持ちの抜けたような発想や言葉。だけど、おもしろい着眼点。それに対して、垣内君が文学少年らしい真面目な、だけど素直な思いを投げかける。二人は、すごく真面目で、かたい人間に見えていたけれど、実はお互いに、自分の素直な気持ちを出し合っていて、ぶつかり合うこともなく、すごく妙にフィットしている。現実的で平和な日常が描かれている。そこがこの二人のやりとりの面白さだと思う。

また、垣内君は、相手をまっすぐに受け止めようとする態度がとてもある少年だ。清へ優しさを見せるのは垣内君だけではなく、清の弟や清が受け持つ生徒もいる。しかし、清が、昔の傷を癒す過程で、この垣内君の優しさは一番なくてはならないものだったと私は思う。

山本さんの死をきっかけに失っていた、自分らしさと、自分がしたいこと。ずっと抱えていた、山本さんへの問い。「私のせいなの?」「どうして死んだの?」「許してくれているの?」

逃げていたもの、乗り越えたくてもきっかけがなかったもの。しかし、その傷を癒し、乗り越えるためのきっかけは、日常の中の些細な気付きや優しさの中にあり、清はそれを自然に体で感じながら、改めて、自分の在り方を見つめていくのだ。そんなことを、この作品を通して感じた。

文芸部活動最後の日、垣内君は清に、スポーツはしないのか、どうして文芸部にいるかを尋ねる。文芸部に初めて来た日、なんで彼は文芸部にいて、なんで自分は文芸部の顧問なのだろうと思っていた清は、逆の質問をされる。最初、バレー部の顧問になれなかったことに不満を抱き、文芸部に良いイメージがなかった清は、ふと考える。そして、自分がここにいることには、ちゃんと理由があったと気付く。そして、垣内君の提案で二人はグラウンドを自由に走り回る。一年間、図書室で一緒に過ごしてきた二人が、冬の寒さをものともせず力いっぱい、気が済むまで、好き勝手に走り回る。目的もなく、だけど意味はあったのだと思う。この後、垣内君が、密かに買っていたサイダーを二人で飲み、二度とできないね、と言いながら、

活動を終える。このシーンの爽やかさはものすごい。読んでいてこちらまで走りたくなる。清は、ずっと忘れていた青春を、垣内君と共に味わっていたのだろう。そして、今までの苦労や辛い思いを、ぬぐいきるかのようには走っているようにも思えた。

最後の章、垣内君は卒業し、清は講師から教師になり新しい勤務先の学校がある地元へ戻る日、清は手紙を三通受け取る。一つは、不倫していた相手からの、応援の手紙。そして、垣内君からの応援の手紙。おいしい所をちゃんと持っていく垣内君の手紙の内容はこうだ。

先生が先生になるなんて、喜ばしく思います。先生の明日と明後日がいい天気であることを祈っています。

最後まで、おい垣内君！と思わずつつこみたくなるほど、おいしい所を持っていき、おいしい言葉を残してくれる少年だ。

そして、三通目は、山本さんのお母さんからの手紙だった。清は、毎月、山本さんのお墓に行っていた。ずっと、山本さんへの問いが離れず、葛藤の中にいた清も、この手紙で最後の傷がとれたのかもしれない。

神様のいる場所はきっとたくさんある。

これは、自分の解釈でしかないが、神様について考えてみた。

清は、過去から逃げたい気持ちを持ちながらも、忘れられない過去に葛藤を覚えながら、日常を流れるように過ごす。しかし、その中で、今まで気

付かなかったことや、人の優しさに触れながら、改めて自分を見つめなおす。そして、自分以外の世界に触れる方法は、教師を続けることだ、と確信する。

神様は、試練を与えると共に、ちゃんと、自分にとって必要なものを与えてくれている。過去への葛藤、高校の講師になること、文芸部の顧問になり垣内君に会うこと、最後の日に三通の手紙を受け取ること。投げやりになっていた清が、この一年間を通して、どこかに神様はいてくれるのだということに気付いたのだと思う。現実にはちゃんと意味があり、必然の中を私たちは生きているのかな、と感じた。

高三にしては、少しおもしろすぎる少年が約一名いるが、現実でありそうな生活を描き、そのちょっとしたできごとを神様とつなげる所が、私はすごく好きだった。

「先生のそういうところ、僕は素敵だと思います」

「へ？」

「国語教師としてセンスがあるって思う」

「何それ」

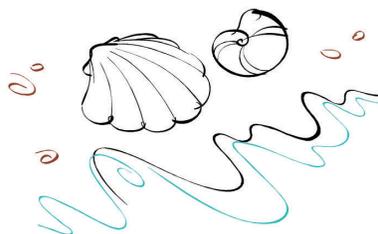
「さあ」

一番気に入った会話だ。こんな生徒に出会ってみたいと思う。

『図書館の神様』

瀬尾まいこ著、マガジンハウス、2003

(まきさとみ・札幌校3年)



■ 岩見沢館 しかけ絵本展

ワークショップ「しかけ付きカードをつくろう」

岩見沢館では、平成21年12月10日(木)～23日(水)の日程で『しかけ絵本展』を開催いたしました。来展者は、延べ465名(学内231名、学外234名)でした。

以前から、「図書館に絵本を入れて欲しい」と学生の強い要望があったこと、また学外者へ図書館をアピールするきっかけになるとの意見があり、図書館活性化プロジェクトの一つとして今回の『しかけ絵本展』を企画し〈しかけ絵本〉を100点以上集め、館内に展示スペースを作成しての展示となりました。『しかけ絵本展』開催にあたり、しかけ付き手作りポスターの作成・主要施設への掲示、ワークショップ等、企画・運営に有志学生が参加してくれました。『しかけ絵本展』初日には、北海道新聞社の記者が取材に訪れ、翌日の朝刊紙面を飾りました。

皆さん、『絵本』と聞くと子供が読む本と思われるのではないのでしょうか？

〈しかけ絵本〉を見る前の学生や先生もそうだったようですが、実際に本を手にとって見た後の「これって絵本なの?」「凄い!」と驚く声、「面白い!!」「このしかけ楽しい」「えっ?こんな風に出来るんだ」と声を弾ませる姿、しかけの構造を見ようと様々な角度から絵本を見つめる姿に、企画が実現したことを喜ばしく思いました。



また、『しかけ絵本展』中は気になる〈しかけ絵本〉を横目で眺めながら「あ～、もうすぐ授業だ。終わったら見に来よう」「わあ。あの〈しかけ絵本〉気になるのに」と、残念そうな顔で図書館を後にし、授業終了後、友達と連れだって図書館に訪れ楽しそうに〈しかけ絵本〉を見る姿も見受けられました。

中には、1度訪れた時とは違う友人と図書館へ来て「ほら、この〈しかけ絵本〉こんなに凄いんだぞ」と、自慢する姿に思わず笑みがこぼれました。

ご夫婦で来館され、最初は居心地悪そうに視線を巡らせていた旦那様が、最後には奥様に急かされながらも真剣に〈しかけ絵本〉に見入る姿も印象的でした。

『しかけ絵本展』中、来館者数を数えるための手作り【しかけ付きカウンター】も登場し、学生・学外者に大好評でした。なかには、〈しかけ絵本〉よりも【しかけ付きカウンター】に興味津々といった学生がいたことは「嬉しい誤算ですね」と制作者の喜びの声も聞こえました。

12月13日(日)には学生が担当してワークショップ「しかけ付きカードをつくろう」を開催。当初10名の予定でしたが、多数の参加申込があり14名に増やすも申し込み間に合わず、見学者もでるほどの人気でした。

当日は、クリスマスツリーやしめ縄等の型紙が用意されており、参加者には作りたい型紙を選んでもらいました。学生が作成した手本を見せながら大まかな製作手順を説明した後、全員で台紙を作成するとそれぞれが選んだしかけの作成に移りました。

しかけの色選び、様々な形のパンチによる型抜き、飾り付け等が行われ、同じしかけを選んでも、雰囲気の異なる作品が出来上がっていく様子に制作者同士でも様々なアイデアの交換が行われ、大変有意義なワークショップとなりました。

ワークショップ参加者からは「今日使った型紙をもとに、家に帰ってから違う色で作ります。ありがとうございました。」と、喜びの声も頂きました。

また、ワークショップに参加できなかった学生・学外の方から次回開催を望む声が多く寄せられました。

しかけ絵本は禁帯出資料となっていますが、小・中学校の授業、教育実習、市民講座などで使用したいと申し出があった場合の貸出許可について検討していたところ、展示資料として使用したいとの申し出があり、しかけ絵本の利用に関する広がりを見ました。

悲願だった絵本コーナーを、図書館に設置できたことを大変嬉しく思っています。

この『しかけ絵本展』をきっかけに、絵本だけでなく他の本や図書館に興味を持ってもらえたのではないかと思います。

今後も、学生の声をもとに様々な企画が実現出来ればと思います。



■ 釧路館 学生選書ツアー

釧路館では、読みたい本や図書館に置いてほしい本を、学生の皆さんが直接書店に行きみずから手に取って選ぶ『学生選書ツアー』を実施しました。

10名の方が参加し、初の選書に楽しそうな雰囲気の中、それぞれが真剣に全部で約100冊の本を選んでくださいました。授業の関係で参加できなかった学生の方も、次回このような企画がありましたらぜひ積極的なご参加をお待ちしています。

実施日時：平成21年11月9日・24日

場 所：コーチャンフォー釧路店



■ 札幌館 図書リユースセール

札幌館では、平成21年10月24日(土)・25日(日)の2日間にわたり、札幌校学生ホールを会場に「図書リユースセール」を開催しました。

この企画は図書館活性化プロジェクトの一事業として開催したもので、図書館の所蔵図書の中で重複等の理由により不用となった図書を低価格で販売し、利用者サービス及び不用図書の有効利用(リサイクル)を図ることを目的としたものです。

詳しくは、附属図書館札幌館のホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。



■ 札幌館 学生選書ツアー

札幌館では、学生の皆さんに、読みたい本や図書館に置いて欲しい本を直接書店で選んでもらう学生選書ツアーを平成21年11月27日に紀伊国屋書店札幌本店で実施しました。7名の学生の方が参加し、47冊の本を選んでくれました。参加した方の感想と選んだ本の推薦文は、附属図書館札幌館のホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。



小著を語る

『更に尽くせ一杯の酒』

— 中国古典詩拾遺 —
(研文出版, 2009.10)

後藤 秋 正
(札幌校・漢文学)

「あとがき」にも書いたことだが、大学を卒業して40年近くたってみると、雑文しか書いて来なかったにもかかわらず、自分なりに愛着を覚える文章がいくらかは残っているものだ。小著に収録する文章を選んでいて、執筆時のあれこれを思い出したのも楽しいことだった。

「川は西に流れるか」は、講義で西晋の詩人・陸機の詩を読んでいた時に、中国の河川はほとんどが東へと流れるのに、陸機が「西流」の語を用いていることについてうまく説明できなかったことが契機となっているし、「漢詩とネズミ」は、一昨年の夏期公開講座でその年の干支に関わる話したことがもとになっている。また、「平安朝初期の漢詩」は、結局刊行には至らなかったのだが、K社が企画した大型漢和辞典の編纂に携わった時

に、勅撰三集の語彙を担当したことから生まれた。ほかの文章にもなごしかの思い出がある。

小著刊行後は、鶏肋には郁達夫『鶏肋集』もあるぞとお叱りを受けたり、次は何を出すのかと、好意的なプレッシャーを与えてくださった方がいたりして、当惑しつつも、ありがたいことだと思っている。この機会に自堕落な自分を戒めるつもりで書いておくと、次は杜甫の詩語についての一冊を何とかまとめたいと思う。

それぞれの文章を発表する場を与えてくださった多くの方々と、小著を刊行してくださった出版社に心から感謝したい。

(ごとうあきのぶ)



なお、後藤先生から札幌館にご寄贈いただきました本書は、平成21年12月27日付け朝日新聞朝刊読書面で書評委員苅部直氏お薦め「今年の3点」のうちの1点として紹介されました。興味のある方は是非ご一読ください。

教職員著作物受贈一覽 ～ありがとうございました～

平成22年2月18日現在 (敬称略、五十音順)

受贈館略号 (札) 札幌館 (函) 函館館 (旭) 旭川館 (釧) 釧路館 (岩) 岩見沢館

◎片山 晴夫

- ・北海道スタディズ：北海道の文学：「北を拓き、北で生きる人間」を読み解く
国立大学法人北海道教育大学教育改善プロジェクト「北海道のことばと文学」編著，国立大学法人北海道教育大学，2009.3，53p (注) 執筆者共著 (札，旭，岩)

◎角 一典

- ・冷熱エネルギーによるまちづくりの現状と課題：北海道沼田町における取り組みを中心に：2008年度社会調査実施報告書 (北海道教育大学旭川校社会学研究室調査報告 vol.6) 角一典編集，北海道教育大学旭川校社会学研究室，2009.3，111p (札，函，旭)
- ・千歳川放水路建設問題年表 1869-2003 (科研費プロジェクト「公共圏と規範理論」資料集・問題別年表：7) 角一典編著，法政大学社会学部科研費プロジェクト「公共圏と規範理論」，2009.3，112p (札，函，旭，釧，岩)
- ・公共圏の創成と規範理論の探求：現代的社会問題の実証的研究を通して：論文集(Ⅱ) (科研費プロジェクト 基盤研究(A) 2007-2010年度課題番号19203027 研究代表者 船橋晴俊) 石坂悦男編集，法政大学社会学部科研費プロジェクト「公共圏と規範理論」，2009.3，169p (注) 執筆者共著 (札，函)
- ・共的セクターの可能性と課題：現代の諸問題と生協：2006年度コミュニティ計画演習IB・総合演習調査レポート 北海道教育大学旭川校社会学研究室[編]，2007.3，182p (旭)

◎木村 育恵

- ・学校教育の中のジェンダー：子どもと教師の調査から 直井道子，村松泰子編，日本評論社，2009.11，173p (注) 執筆者共著 (札，函，旭)

◎後藤 秋正

- ・更に尽くせ一杯の酒：中国古典詩拾遺 後藤秋正著，研文出版，2009.10，257p (札)

◎佐々木 馨

- ・北海道の宗教と信仰 佐々木馨著，山川出版社，2009.8，261p (札，函，旭，釧)
- ・日蓮と一遍：予言と遊行の鎌倉新仏教者 (日本史リブレット人；033) 佐々木馨著，山川出版社，2010.2，94p (札，函，旭，釧，岩)

◎佐藤 徹

- ・動きのコツをつかませる体育授業の開発：生徒のキネステーゼの現象学的分析から 科学研究費補助金成果報告書，基盤研究C，2008.3，48p 課題番号17500390 (岩)

◎庄井 良信

- ・創造現場の臨床教育学：教師像の問い直しと教師教育の改革のために 田中孝彦，森博俊，庄井良信編著，明石書店，2008.12，446p (注) 執筆者共著 (札，函，旭，釧，岩)

◎鈴木 明彦

- ・詩と思想：詩人集2009：POETRY and THOUGHT 2009 「詩と思想」編集委員会[著]，土曜美術社出版販売，2009.9，299p (注) 執筆者共著 (札)

◎竹内 康浩

- ・中国の復讐者たち：ともに天を戴かず (あじあボックス；064) 竹内康浩著，大修館書店，2009.7，199p (釧)

◎辻井 義昭

- ・天柱山の摩崖：鄭道昭研究 辻井京雲著，匠出版，2001.4，94p (札)

◎氷見山幸夫

- ・地球環境読本：外務省日中研究交流支援事業 松井孝典，白岩松他編著，東京財団制作・発行，2009.2，32p (注) 執筆者共著 (札，岩)

◎松浦 俊彦

- ・基礎から学ぶDNA一分子観察：先端バイオイメージング：報告書：平成21年度理数系教員指導力向上研修 (希望型) 北海道教育大学函館校，2009.9，51p (注) 執筆者共著 (札，岩)

◎吉田 正生

- ・我が国を視点にした英国シティズンシップ教育の計画・実施・評価・改善の研究：地方行政局と大学と学校が連携した教育 PDCA 開発 科学研究費補助金成果報告書，基盤研究A，2009.3，214p 課題番号17203042 (注) 研究分担者 (札，岩)
- ・中学校社会科教科書に現われたアイヌ民族関係記述について 科学研究費補助金成果報告書，基盤研究C2，2008.3，484p 課題番号18530671 (旭)

LIBRARY NEWS 附属図書館からのお知らせ

全館共通 <http://s-opac.sap.hokkyodai.ac.jp/library/>

■ 携帯電話からの貸出予約について

携帯電話版 OPAC から貸出予約が可能になりました。初めて利用する方は申請が必要です。

■ Web 貸出サービスの開始

広大な面積を有する北海道において学校教育に従事する現職教員を支援するため、本学附属図書館の蔵書を郵送で貸し出すサービスを平成22年4月から開始します。

□ 貸出対象者

本学附属図書館に直接来館できない北海道内の小学校・中学校・高等学校・幼稚園及び特別支援学校の現職教員。

□ 登録申請

図書館ホームページから利用申請書をダウンロードし、郵送、FAX またはメールで下記宛てにお申し込みください。登録完了後、ユーザーIDとパスワードを通知します。

□ 図書の貸出について

- ・貸出冊数 5冊以内
- ・貸出期間 郵送期間を含め3週間
- ・本学附属図書館5館の蔵書をご利用いただけます。
- ・研究室図書・辞書類・雑誌類・視聴覚資料など貸出できない資料もあります。

□ 貸出申込方法

図書館ホームページの蔵書目録からお申し込みください。

□ 図書の発送と送料

- ・札幌館から勤務学校に着払いで郵送します。送料は往復とも申込者にご負担いただきます。
- ・貸出希望図書はすべて札幌館からまとめて発送します。

□ 申込先

北海道教育大学附属図書館札幌館
情報サービス担当

〒002-8503

札幌市北区あいの里5条3丁目1-6

t-sanko@sap.hokkyodai.ac.jp

TEL 011-778-0288 /Fax011-778-7052

図書館ホームページにも詳しい利用方法を載せていますのでご覧ください。

札幌館 <http://s-opac.sap.hokkyodai.ac.jp/library/top.html>

- ・論文検索のためのデータベース・電子ジャーナルの使用法の習得を目的としたガイダンスを実施しています。個人やゼミ単位等での参加をお待ちしています。

〒002-8503 札幌市北区あいの里5条3丁目1-6

TEL 011-778-0288

函館館 <http://www.h-lib.hak.hokkyodai.ac.jp/>

- ・現在、「元気の出る本」をテーマに、新しい図書が続々と入っております。「学習マンガ」や「旅行ガイド」「自己啓発本」「絵本」などの図書がありますので、ぜひご覧ください。

〒040-8567 函館市八幡町1-2

TEL 0138-44-4231 (発信専用: 0138-44-4399)

旭川館 <http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/office/tosho/>

- ・この号が出るころ、元気が出る本として、ヤングアダルト(中高生向け)図書が新たに100冊ほど増える予定ですので、入りましたら読んでみてください。また、この機会に新着図書の書架にある新しい本もご覧ください。

〒070-8621 旭川市北門町9丁目

TEL 0166-59-1235

釧路館 <http://www.kus.hokkyodai.ac.jp/users/library/>

- ・図書館では引き続きガイダンスを実施しています。※新入生向けガイダンスや参考文献収集のためのガイダンスを実施しています。くわしくは図書館カウンターにてお問い合わせください。

〒085-8580 釧路市城山1丁目15-55

TEL 0154-44-3243

岩見沢館 <http://tosho.iwa.hokkyodai.ac.jp/>

- ・論文作成のためのOPAC及びCiNiiの講習会の希望を受け付けています。いつでもカウンターへお問い合わせください。

〒068-8642 岩見沢市緑が丘2丁目34-1

TEL 0126-32-0240